

會 長 講 演

土木學會誌 第十二卷第一號 大正十五年二月

余が在職三十餘年の回顧 (大正十五年一月十六日
土木學會定時總會に於て)

會長 工學博士 日下部 辨二郎

内 容 梗 概

本編は演者大學卒業當時の本邦土木界の狀況より在職三十餘年間に於て演者が 遭遇せし
事柄又は其間感ぜし事等を追懐し、僅か三十餘年間に如何に我邦土木業の發達せしかを知ら
しめんと試みたるものなり。

諸君、私は昨年二月、前土木會長中島氏不時の薨去に依りまして補缺選舉の結果その後任
に選ばれた者であります。私はその際にも固く御辭退申上げた次第であります、と申します
のは私は元來淺學菲才、何等今日迄土木學界に貢献したこともない、殊に土木の事務から離
れて居ること十餘年、モウ所謂豫備 後備を通り越して國民軍に入つて居るやうな有様であり
まして、多少知つて居た事もモウ忘れて了ひ、僅に餘命を繋いで居る老朽者であります。斯の
如き者がこの權威ある土木學會の會長たることは、土木學會の威嚴を損する次第であると思
ひまして固く辭退を致しました次第であります。然るに市瀬副會長その他野村前會長、又吾
々の大先輩たる古市博士等から懇々お諭が有りまして私は絶體絶命之に處するに苦みまして
その任に非ざることを承知しながらお請けを致した次第であります。幸に今日迄大過なくこ
の大任を全う致したのは是等先輩諸君の御指導又副會長以下役員諸君の御援助の賜であ
ります。この機会に於きまして深く御禮を申し上げます。

擬、前申します通り、私はその器に非ざる會長でありますから何も申上げることも御座
いません、しかし會長講演と云ふことは、是は恒例になつて居る事でありまして止むを得ず
申上げる次第であります、私は前申す通りモウ國民軍にも入つて居るもので土木の實務に
も離れて居ります、多少知つて居つた事も忘れ、又材料を蒐集することも非常に不便な立ち場
にあつて、何等持合せが無い、又多少ありました所が私の申上げることは皆様疾に御承知の
ことで、否御承知どころではない、より以上御承知でありますから冗らぬことを演壇に登つ
て諸君の御清聽を汚すと云ふことも甚だ心苦しい次第であります。去り乍ら何か喋舌つて責を
塞がなければならぬので已むを得ず私が明治十三年學校を出まして三十餘年間官吏或は公

吏をやつて居りましたその間に出會つた事柄、或は感じた事柄を1,2に申上げてこの責を塞がうと思ふのであります。勿論前申す通り會長の講演としては三文の値打もない、唯老人の昔話としてお聴取りを願ひたいと思ひます。

私は明治十三年に東京大學の土木科を卒業した者であります。當時のことを考へますと既に45年程前のことでありまして、今夕御列席の諸君の中には當時この世に出て居らぬ方もありませうし、縦し又お出でになつてもお母さんの乳を飲み腕白盛りの茶目公であつたと思ひます。その時代のことを考へますと實に隔世の感がある。例へて申しますと、私が出ました明治十三年頃は東京市に於きまして土木の見るべきものはどんなものがあつたかと申しますと、何も無い儘に鐵道が東京、横濱間と關西に於きましては神戸、京都間が通じて居つたやうな時代でありました、その時分東京にありました橋を以て申しますと、京橋區に彈正橋と申すのがありました。それは當時松本莊一郎氏(後の鐵道長官工學博士)が東京府の御用掛になつてやられたが氏の設計になるものでありました。今から考へると實に詰らないのであつたが、その頃はそれが唯一の鐵橋で型はウヒップル・トラス (Whipple Truss) でありました、それと私の先輩の仙石博士が設計せられた木橋で京橋區に出雲橋のハウ・トラス (Howe Truss) があつた。是等は西洋橋の見本で珍しいものであつた。又鐵道橋では六郷川のウォレン・ガーダー (Warren Girder) が唯一の鐵橋でありました。勿論、其時分ストーン・アーチの橋も1,2ありましたが、是等は當時の學者がやつたのではなくして、御承知の通り當時東京市の各處に見附が澤山ありました。その見附を壊した石の廢物を利用して架けられたものであつた。其エンヂニアはどう云ふ人であつたか知りませぬけれども、何でも鹿児島邊から連れて來られた人であると聞いて居ります、(御承知の通り同地方又は熊本地方には從來からストーン・アーチがございました。是は清正が朝鮮から傳授を受けて來て架けたのであると云ふことを傳へて居りますが、)假令で見れば萬世橋、淺草橋、それから江戸橋も出來て居つたかと思ひます。是等の橋が別段に計算上から成つたに非ずして、舊來の經驗から拵へたものであります。私が在學中一日教師に連られて淺草橋を實驗したことがあります。それを計算した所が計算上では逆も保たない、所謂リアル・アーチがミッドル・サードからずつと外れて居つて實に危いものであつたがそれでもよく保つて居りました。其時分その下を通ると劍呑だと云ふので、俗に念佛橋の稱があつたと覺へて居ります。さう云ふやうな次第ではありましたが内務省ではその頃既に河川の方には多少力を盡しまして和蘭人を備つて、河川改修工事を施して居りましたが是とても極く微々たるものであります。殊に其頃は單に低水工事のみで高水工事は夫からゾット後れて行はれたのであります。私は大學を出ました明治十三年の暮に内務省の土木局に奉職しましたが當時私の同窓は7人で、その中4人は内務省に入りました。その内務省に入つたのはどう云ふ譯であるかと云ふと、御承知でもありま

せうが、その當時は東京大學と工部大學と兩方ありましてこの兩方から卒業生が出ましたが、工部大學は工部省所轄の役所に義務的に奉職させられたのでありましたが、東京大學の出身者は是等の拘束を受けず自由であつた。斯う申しますと可笑しいが俸給等も工部大學の出身者は頭から幾らと云ふことで定められて大變安く採用されて居りましたが、東京大學の方は拘束を受けない事になつて居りました。しかし内務省の方は餘り給料はよくございませぬでした。その頃府縣にも充分な仕事もなく、先づ内務省ばかりで前に申しました通り河川工事を行つて居り、且つ外國人も傭つて居られることでありますから吾々駆出しのホヤホヤは月給よりは寧ろ實地の稽古が出来るからよい、立寄らば大樹の下と云ふやうな積りで内務省に入つた譯でありました。それ迄の河川工事は木曾、澁、利根、信濃川の 4 川でありましたが、私共の入つた頃は北上、大井、天龍、富士と云ふ川が新たに内務省直轄になつたのであります。それで、私は北上川の方に向けられました。けれども北上川はまだ何も手がついて居ない、唯北上川は奥州の大きな川と云ふぼんやりしたものでありました。吾々が参つて初めて平面測量、高低測量、深淺測量等凡て自分でやらなければならない、のみならずその時は測量工夫なども甚だ徹底でそれを職業にしてゐる者もないから吾々が行く先々で農夫を傭ふてそれを段々仕立てなければならぬ。それでありましたから吾々は自分でチェーンマンやらスーモン、ロッドマンもやり今では工手學校程度の卒業生ですら厭やがる仕事をして初め 3 年間と云ふものは殆ど測量ばかりに従事して居つたやうな次第であつたのです。併し、洵に詰らぬ仕事をして居るやうでありますけれども、私には私の考があつたのであります、即ち河川に付てはどうしても一つ處に永く居ることが必要であると云ふことであります。その川の性質を知らなければその川を直すことは出来ない。病人にしてもその病人の平生の容態から健康の如何と云ふやうなことも能く知らなければその病氣を治すことは出来ないと同じにその川の性質を能く知らなければならぬと云ふことを大に感じて居つた。仕事は甚だ詰らぬやうであつたけれども、私はそれを詰らぬと思はずにやつたやうな次第でありました。それでマアさう云ふことに 3、4 年従事して居りましたがその後折角自分で測量をやり、愈々是から改修工事に着手すると云ふ場合に健康上の都合に依つてその川を去ることになりまして、今度は關西の方に向けられました。初めは澁川夫より吉野川の方に向けられまして、彼是して明治十九年頃になりました。所がその頃になつて大分各處に土木工事が起り、鐵道も段々盛になり、又海軍は鎮守府の工事があると云ふ風に非常に土木工事が勃興して來ましたに付て、民間に於ても唯今の太田男爵邊りが發起人になつて日本土木會社が出来ました。さう云ふ大きな會社が出来るとは技術者も要るので、當時内務省に居りました者から無關に高給を以て引抜きに参りました。當時内務省に居りました吾々の先輩の 1 人が之に應じ、それに連れて續々引抜かれて大に内務省邊りも恐慌を來したやうな次第でありました。斯く申す私も

當時の月給の倍以上で實は誘引されましたけれども、私は前に申しますやうな考を以て、或は馬鹿正直な考かも知れませぬが、濫りに給料の多寡に依つて所信を翻へすものぢやない、自分の信じて居る所に居る方が宜いと云ふ考でその勧誘を排して始終内務省に居つたやうな次第でありました。

さう云ふ譯で民間でも頻りに技師を要するやうになり、続々有爲の人を引抜くやうな次第でございますから、内務省始めその他の官廳でも之の正當防衛とでも申しますか防禦策を講じまして、吾々も多少その位置を高められました。即ち内務省は卒先して當時技手であつた我我を俄かに技師に致しました。その時分技師も一等から六等迄あつたが私共は五等技師にして貰つた譯でありました。所が又今度官廳の方で競争が始まりまして、内務省では五等技師は吾々卒業生中で一番高い所であるのに海軍では一躍三等技師、四等技師に昇げた。是で技術社會の中に少し權衡を得ぬやうなことも起りました。けれども、追々それも直つて行つたやうに記憶して居ります。それで、明治十九年に御承知の通り從來の太政官制度が今日の内閣制度に變りまして、その時分に復内務省邊りの土木制度も變りまして、土木監督署と云ふものが出来まして、吾々はその監督署の技師になりました。その土木監督署はどう云ふ仕事をするかと申しますと、前に申しました直轄工事をすると同時に地方の土木工事を同時に監督する、又土木工事に關する色々の調査をする。斯う云ふ三つの部類を有つた役所でありました。地方におきまして先づ水害がありますと其災害を被つた縣でそれぞれ復舊工事費を見積つて内務省に持出す、すると内務省は検査官を派遣して實地検査をなし相當の補助をすることになる、處が此縣の設計などは随分亂暴なものでありまして、地方によりては老獪な知事でありまして、この時と思つて、所謂糊序での洗濯と云ふ格で何でも書出すことがある爲に、それが非常に多額に上る、然るにそれを検査する人はどう云ふ人かと云ふと、吾々がまだ内務省で芽を出さぬ内は土木局屬官が皆出掛けて行く、此屬官たるや土木工事の事を深く知つて居る人でも何でも無い。或は舊幕時代の御普請掛とか、又御雇外國人の通譯をして居つて多少土木を覺えたと云ふ人などでそれが検査をする、是等が検査に行つてどう云ふことをするかと申しますと、甚だ申しにくいのであるが、主に御馳走政略で誤魔化されて了ふ。さうして好い加減のことをやつて来る。随分甚しいものになると、その水害費の補助を貰ひまして、何處の村では學校が出来たとか、何處の村では村役場が出来たとか、甚しきに至つては芝居小屋を拵へる(笑)と云ふ有様である。是等のことは明治十八九年頃迄あつたやうに聞いて居ります。

それから十九年頃吾々が技師に成つたホヤホヤの頃でありましたが、當局でも是ではいかぬと云ふので——(鳥渡申落しましたが、その頃内務省には吾々の學校を出た者の外に古市博士——古市博士は偶然私と同日に土木局に入つたのでありました。尙博士と同じく佛國で學ばれた山田寅吉氏又米國仕込の宮之原誠藏氏とか獨逸仕込みの田邊義三郎氏、それから

又本會の前會長たりし沖野博士及石黒博士等もお入りになつて居りました其外東京大學工部大學卒業生も追々就職されて居りました。) 新たに水害検査心得と云ふものが出来従來の弊害を矯めようと云ふ事になり、又検査官も是までの様な人のみに任せぬ事になりました。明治十九年に私が初めて水害検査を命ぜられ先づ高知、愛媛兩縣に出掛けました出掛ける前に局長から前申す水害検査心得の訓示を得まして、その心得に依つて検査しました所が縣廳邊りでは従來の積りで居つたので、餘程意外に思つたやうでございましたけれどもそれ以來随分検査と云ふものは無茶なことは出来ないと思ふことを感じたやうでありました。併しそれから後もまだまだ其弊は全く失せずありました。現に私が或縣に参りました時に、何々村の何箇所と云ふ破損箇所の設計がある。縣官に案内せられて行つた所が、それらしき損所も見へぬ、縣官も狼狽してイヤ是は場所の書損である今少しく先まで御苦勞下されと1里行き2里進み遂に縣界まで行つても何も無かつたと云ふことがあつた、これは随分偏鄙な且交通不便の土地だからマサカ我々が行くまいと思ひ出鱈目の設計を計上したものと思はれる。如此有様で検査の結果我々の査定額は縣廳上申の約1割強に減じた事もあつた。内務省に土木監督署が出来ました以來直轄河川工事をやる傍、縣の工事を監督すると云ふことに付ては多大の貢献をしたことであらうとマア自盡自費ではありますけれども思つて居ります。御承知の通り縣など云ふものは今日でもそうでありませうが、政黨の勢力で不必要な處に道路を拵へ或は有力な縣會議員でもであると迂回してまでもその居住地に大きな道路を拵へると云ふやうなことがあつた。併しながら土木監督署の眼から見ますと、さう云ふことは少しも眼中に置かないから極く公平な判斷が出来たと思つて居ります。併し明治三十七、八年の頃でしたか土木監督署は廢せられ専ら直轄工事のみのため土木出張所と改まりましたが是は私は今でも甚残念な事と思ひます、其理由は深山ありますけれ共今更死んだ子の齡で益なき事故略します。それから少し前に戻りますが、前に申した通り内務省で河川改修と云ふことに重きを置かれましたのは明治五、六年頃からのことで和蘭國より長工師ブワンドールン氏を始め數人の技師を連れて來ました。技師のみならず技手工夫頭の様々な人々まで連れて來たやに聞及んで居ります。その頃は主に低水工事をやつて居りまして、我國で沈床工事を始めたのは右和蘭人の直傳であらうと思ひます。同時に砂防工事などは随分有效な仕事であつて、私は滋賀縣の出身であります、私共の子供の時分の江州の山々は何れも禿山でありまして樹1本も無い實に酷い有様でありましたが、是等も矢張り淀川の水源に屬して居りますので、砂防工事を施しました。この砂防工事も色々ありますが、それ等を各處に施したので、その功果は随分著しいもので、今日お通りになつて御覽になつても山は依然禿げては居るが左程甚しいものになつて居らないのは全く砂防工事のお蔭と思ひます。長工師ブワンドールン氏其他 2、3の蘭人は私共が内務省に入りました頃には最早解雇になつて居りましたが、ムルドル、デレー

ケと云ふ2人は残つて居りましたが是も確か二十四年頃と思ひますが相次で解雇になりました、詰り前に申した通り内務省にも古市博士を始めお歴々が出来たので到頭外國人を追拂つたやうな譯でありました。併し彼等の我國の治水工事に貢献したことは決して没却する譯には参りませぬ、その功勞は随分あつたことと思ひます。

前に申しました通りに、内務省の當初の方針は河川工事の主に低水工事でありましたけれども、段々水害も非常に度重なるに連れまして、其の間に議會も開かれ、議會からも建議されて高水工事を施さなければならぬことになりまして、主なる河川は高水工事を施されることになつたのであります。私は餘程水害に縁があると見へ至る所で水害に出喰はした前に申上げた北上川を去て病氣靜養中でありましたが、明治十八年大阪府下大洪水で同府牧方と云ふ所の堤防破壊し淀川洪水の殆ど全水量が此切れ口に流れ込み、河内國全部を水に浸し大阪市に及ぼし此時大阪市内の主なる橋梁は皆落ち市内にも數日浸水した箇所があつた、(其お蔭にて大阪市は橋梁再築に方りて多數の鐵橋が出来た)そこで私は靜養中より引張り出され急に大阪府に出張して此切れ口の復舊工事に従事した、何分殆ど全水量とも云ふ可き多量の水が流れ込む事なれば晝夜兼行で工事に従事しても全く水を防ぐには彼等は3週間位は掛つたと覺へて居る、夫れから翌十九年徳島に轉じてからは前申した愛媛、高知の水害に出逢ひ、又二十一年には徳島縣吉野川の洪水、二十二年に再び大阪に轉じては又々京都、大阪、兵庫、和歌山、奈良の諸府縣に大洪水があり、其後廣島に於ける土木監督署勤務中山陰、山陽諸縣の大洪水、其後東京の第一土木監督署に轉じては神奈川、埼玉、茨城、栃木、山梨諸縣の大洪水、其間には有名なる足尾銅毒事件もあり、私の不徳の致すところかも知れねども殆ど水害屋の觀があつた、其内に河川法なるものも出来又土木會と云ふのも組織され主な河川問題は此會に諮詢される様になつた、其内吉野川に付きまして鳥渡お笑ひになるやうなことを申し上げたいと思ひます。吉野川の工事の内低水工事は内務省直轄であつたけれ共高水工事は其頃は縣でやることになつて居た。則ち堤防は縣の仕事になつて居りました、設計は内務省でございましたけれどもその施行は縣でやることにその當時はなつて居りました、その時その一部分に覺園村と云ふのがありまして、其村の堤防が土地買上げとか何とか地方で八釜敷くなつて申々仕事が運ばない。吾々は徳島に居りまして頻りに督促をするが仕事が始まらぬ。それが二十一年の七月の大洪水の爲に殆ど九分九厘出来上つて居つた堤防が決潰致しまして、それが爲に田畑の損害は勿論人畜の死傷もあり現に内務省の雇2人程も溺死をしたやうな酷い洪水でございました。所が住民は自分等が色々苦情を言ふた爲に堤防工事が後れたに拘らず今迄吉野川にそんな洪水が無かつたのに内務省で沈床工事をされた爲夫が水の流通を妨げ其の爲に堤防を壊したと云ふことを頻りに唱へまして、それが大變八釜敷くなりまして結局縣會も之を容れ、徳島縣は遂に吉野川の改修工事を中止すると云ふ建議をしたことになりました。後では

大分後悔をしたやうでありますけれども當時は非常な勢であつたから、政府も到頭之を容れて工事中止となりました。所がその堤防が壊れてその復舊に付きまして矢張り政府から幾らか金を出さなければならぬ、金を出すに付ては誰か責任者が必要である。それで時の局長から私共に進退伺ひを出せと言はれました。所が私はまだ二十代の血氣盛りの時代でありましたから「何のこつた、我輩は充分監督の任を盡して居る、縣廳の役人にも度々督促をし自分としては少しも怠慢なことはない、吾々の言ふことを充分に聽かずしてやつたから遂に斯る大損害を來したので自分は充分監督の任を盡して居るから進退伺ひは出さない」と言ふて強情を張つた。けれども何か出さぬと政府から金を出すのに困るからと云ふ懇々話があつて、「それならばまでの頭末書を出さう、頭末書なら出すが進退伺ひは出さない」と頑張つた。「それで宜いから出して呉れ」と云ふので始末書を出した所が文句は忘れたが「吉野川の堤防工事の監督を怠つたのは不都合に付譴責す」と云ふ意味（笑）の以ての外な辭令を貰つた。先づ言はゞベテンに掛つたやうなものです。兎に角苦情を言ふた所が泣く子と地頭に勝たれぬので澁々を受けた。然るに其日私宅に歸つて見ますと秘書官から秘親展書が來て居つたそれを讀むと「今日貴官は譴責されたが都合によりてこれは公けにせず官報にも載せぬから貴官も其積りで決して公けにするな」云々（笑）誠に妙な譴責もあつたものです故に私の履歴は綺麗になつて居るのでございます。

まだお話は何分永い間のことですから幾らもありますけれども餘り冗らぬことを申上げるのも如何と存じますからこの邊で止めますが、その後私は三十九年迄内務省の御厄介になりました、それから8年間市の技師長として市の御厄介になりましたが、妙な因縁で私は土木學會々長に中島博士の後を襲ぎましたが市の技師長も亦中島博士の後釜に据はつたのです。是は大分新しいことでこの席にお出でのお方も御承知のことでございますから止めます、前申す通り私のお話は會長講演などと云ふことでなく、唯老人の懷舊談とお聽きを願つて是位で御免を蒙りたいと思ひます。（拍手）

上の講演後次の質疑應答ありたり

- 那須章彌君 問 鳥渡伺ひますが和蘭人ばかり呼寄せたのはどう云ふ譯でありました。
- 日下部會長 答 それはどう云ふ譯か知りませぬ。或は古市さんは御承知かも知れませぬ。
- 古市博士 答 それは、聞く所に依ると、和蘭人は水で苦んで居るので、日本の河川を修理させるには和蘭人が宜からうと云ふのが原因らしい。それ以上の事は私も知りませぬ。

（完、拍手）